最優秀賞（中学校部門）

バリアフリーな和歌山県

田辺市立高雄中学校　三年　　石橋　雪乃

私は、二〇四〇年頃の和歌山県が、障害者でもよりよく暮らせる町であってほしいと考えます。理由は、高雄中学校で段差をなくすために、スロープの工事が行われているのを見かけたからです。身近でバリアフリー化が行われている中、障害者が今よりも暮らしやすくするために、必要なことは二つあると思います。

一つ目は、私たちが障害者を理解することです。今世界には、何らかの障害で苦しんでいる人が人口のおよそ十五パーセントいるとされています。それだけ障害は誰にも生じる身近なものということです。また、外見では分かりづらい障害を持っている人もいます。例えば、聴覚障害や心臓や腎臓の内部障害の人たちは障害があると気づかれずに、日常で困ることが多いと思います。そのために私たちは、もう少し障害に対する理解を深めることによって、障害者が生活をしやすくなると思います。

二つ目は、日常生活や事業活動の中で配慮や工夫を行うことです。私のおばあちゃんは、十一年前に脳こうそくになって、足が不自由になり、一人で歩くことができなくなりました。そのため、家もリフォームして、手すりを付け、バリアフリーにしました。誰かが付きそっていないと、一人では歩けないので、一人で外出もできなくなりました。脳こうそくになる前のおばあちゃんは一人で原付バイクに乗り、毎日買い物へ行ったりして出かけるのが大好きな人でした。けれど、買い物に行くにも誰かの助けが必要で、なるべくバリアフリーの場所を探さないといけなくなりました。

しかし、和歌山はバリアフリーの場所が少なく、車イスを置いているお店も少ない事に気づきました。都会に比べ、和歌山は障害者

のための配慮が足りないと思います。
おばあちゃんは、脳こうそくの後遺症でうまく話をする事ができないので、筆談などを気軽にできるようなお店づくりをしたり、耳の不自由な人のために手話ができる店員さんを勤務させたりしてくれると、障害者の人達はより良い生活ができると思います。
そのためには、会社で無料の手話教室に行ったりして、社員教育を充実させていくと、耳の不自由な人もコミュニケーションがとりやすくなると思います。
二〇四〇年頃の和歌山県は、バリアフリーになっているのが普通の事で、お店全てに車イスがあり、手話ができる人もたくさんいて、筆談する事も恥ずかしくない、そんな優しい世の中になっていてほしいです。